

## 昆明アゲイン

五月三〇日(日)午前九時。雨が降っていた。厕所(トイレ)で小便をし、候车室のベンチで休憩をした。人気のない候车室。

昆明のバスターミナル。しかしここがいったいどこなのか、僕には分かってはいないのだ。数日前、駅前で手に入れた昆明市区交通図を広げて、バスターミナルを捜した。ざっと調べたところではバスターミナルは昆明市の西北、翠湖公園付近の小西門汽客運站しか見当らなかつた。昆明西方の大理から戻ってきたのだから、おそらくここなのだろうと、僕は思う。

雨は強くなったり弱くなったりしながら降り続いて、雨の街に出ていくのはおつくうだった。数日前、上海以来久しぶりに再会した宮本君との約束(一緒に石林へ行こうという)があつたので、昆湖飯店に泊まる必要があつたけれども、昆湖飯店は昆明火車站の近く。今いるバスターミナルからはかなりの距離があつた。

候车室のベンチに腰を下ろして、しばらくぐずぐずしていると、服務員が候车室の掃除を始めた。コンクリートの床にホースで水を流しながら、端の方から床を洗っていく。とてもゆっくり落ち着いていられる状況ではなくなってきたので、それをふんぎりにして僕は立ち上がった。

候车室の外に出てみると、ターミナル前の小広場の片隅に、米線の屋台が店を出していた。雨はまだ降り続いて、屋台のベンチやテーブルも雨に濡れていた。客たちはテーブルを被うパラソルの下で身を縮めるようにして、米線を食べていた。腹が減っていたので、なるべく濡れていないベンチを捜して、腰を下ろした。大盛り、一・五元。ようやく小降りになってきた雨に濡れながら食べる米線の熱いスープがおいしかった。

少し元気になって、バスターミナル前の大通りに足を踏み出した。車が繋ぐ行き交う大通りに立ったとき、不思議になつかしい気がする。それは大理という静かな街から、かしましい大都会へと戻ってきたのだという感覚なのかもしれないけれども、それ以上にここはなつかしい、知っている場所だという感じがしたのである。もちろんなにか具体的な建物などに見覚えがあるということではなかったけれども。

とりあえずバス停を捜そうと思いつきながら歩道を歩き始めた。すると、ここは知っているという感じがぐんと大きくなり、「あれれ？」と僕は思う。立ち止まり、振り返り、もう一度あたりを見まわした。何のことはない。ここは小西門ではなく、火車站の近く、昆湖飯店からも目と鼻の先の場所なのだ。数日前何度もその前を通り、なにげなく通り過ぎていた敷地がバスターミナルだったのだ。僕の持っている地図には載っていないけれど

も。

自分が今いる場所がはっきりと分かり、しかもそれが昆湖飯店の近くだったので、勝手知った街を行くように僕は元気にホテルの方へと歩いていった。折よく雨も上がり、朝の街路にもどことなく活気がよみがえっていきようだった。

昆湖飯店の小さなロビーをまるで常宿のように勝手知った気分で横切り、フロントへと向かう。

「我想住你们飯店。多人房有吗？」

「没有」

女性の服務員は、僕の気さくな気分などにはおかまいなしにそつげなく答えた。てつきり数日前と同じドミトリーに泊まれるものと思いついでいた僕はちよつと焦る。僕のその焦りを見透かすようにして、服務員は一泊八〇元のツインならば空いていると言葉を続けた。

ロビーのソファアーに腰を下ろして煙草を一服しながら、方針を検討した。他の安宿も昆明にはあるけれども、ここからは離れていて宮木君と落ち合うのにも不便だし、洗濯もしたいし、風呂にも入りたい。ここはちよつとぜいたくをして、ツインの部屋でゆつくりしよう。明日の夜はまた夜行列車に長い時間揺られなければならないのだからと。

そのように納得してツインの部屋にチェックイン。しばらく休憩したあと、洗濯をした。春城（煙草、一・五元）を吸いながら、本日の予定を決める。まず明日の夜発、成都行き列車のチケットを手に入れること。

明日の石林観光のバスを調べることに。それから下町の散歩。たまたま地図に西寺塔、東寺塔というカッパルになっている塔を見つけたので、どういうところかは分からないけれども、それを目印にして歩いてみよう。午後からはこの前時間が間にあわなくて入れなかった円通寺へ行こう。

ホテルを出る前にドミトリーの部屋を覗いてみたが宮木君はいなかった。たぶん飯か散歩に出ているのだろう。夕方にもう一度覗いみることにして、ホテルを出た。

昆湖飯店から火車站へ、北京路を南へと向かう。さつき出てきた汽車站（パスターミナル）の付近には小さな旅行社が何軒もあり、石林へのツアーを売り出していた。付近には石林行きのミニバスも目についたので、明日の朝このあたりで飛び込みでミニバスをつかまえたらいだろうと僕は思う。

火車站の售票処はあいかわらず混雑していた。掲示を調べてみると、硬臥はすべて売り切れ。三日前の売出し日に並ばないと買えないような様子だった。外国人窓口など、外国人に対する特権もないようで、仕方なく成都方面の硬座の行列に並んだ。目指すは昆明二二・二五発、成都一九…

五六着、九四次特快列車。

行列は遅々として進まず、混雑はいかかわらずだったけれども、確実に窓口は近づいてくる。というのも、窓口にはひとりずついかめしい顔をした服務員が立ち、行列に並ぶ人々の挙動を監視していたからだ。横入りをしようとしたり、順番を守らなかつたりと、少しでも不審な挙動を見つけると、服務員は大きな声を上げて威嚇するのだった。外国人の観光客が多い昆明という街だから無秩序な駅の様子を見せたくないのだろうか。おかげで安心して行列に並んでいられたけれども、服務員の権力剥き出しの態度はどう考えても好感のもてるものではなかった。

ともかく行列に三〇分ほど並んで、窓口に向かうときにはやはりドキドキとした。窓口の掲示にはやたらと『無』というのが多くて果たして売っているチケットがあるのかと思われるほどだったからだ。しかし心配は取越し苦労だったようで、明日の夜九時二五分発の列車の硬座を取る事ができた。ために、

「カオチャンデ、カオチャンデ（窓際、窓際）」

と注文すると、その通り窓際の席を取ることができた。丸一日近く乗ることになるのだから、せめて壁にもたれられるシテーブルにうつぶせることもできる窓際を、と思ったのだ。

なにはともあれ成都行きチケットを手に入れることができて、午前遅くの雨上がりの昆明のようにすがすがしい気分で、僕は售票処を出た。駅前からバスに乗って西、東塔寺付近で下車。弥勒寺新村とか復興新村と名付けられた下町を歩いた。雨上がりの下町の歩道には人通りもまばら、雨に濡れた並木も密やかな生気を放っているようだった。商店などが並んだ大通りを外れて、裏通りの小道へと入っていった。

昨夜からの雨で泥だらけになった小道をたどり、ふと何かの工場の跡地らしいだっ広い瓦礫の荒野に出くわす。敷地のあちこちには煉瓦や廃材などが散らばって、敷地の向こうには煉瓦で作られた煙突がそびえていた。朽ちた赤い煉瓦の廢屋。引き込まれるように瞬時その光景に立ちつくした。

小道はそのまま行き止まり。一度大通りへと引き返し、東寺街と名付けられた路地を入っていった。その路地は付近に市場もあるらしく、果物や雑貨の露店も店を出していて、賑やかだった。ゆつたりとした気分の人々の賑わいの中を漂っていった。

ふと、頻繁に耳にする香港歌謡のメロディーが流れてきた。どこへ行っても耳にするとと言ってもいいほどヒットしている歌謡曲で、ビニールシートにカセットテープを並べた露店から流れてくるのだった。あわてて、流れている歌を指差すようにして「この歌の入っているテープを」と身振

り手振り、露店の男に訴える。男は雑然と並べられたカセットテープを探つて、その中のひとつを取り出した。

東寺街から西塔寺の方へと細い路地を入っていった。その路地の両側は診療所のような建物が並んでいた。薬局や診察室や、病棟のような建物。どうも場違いな所に紛れ込んでしまったような気がしつつもさらに進んでいくと、塀の向こうに西塔寺の塔がのぞいていた。塔もまた何かの医療施設の敷地内にあるらしくて、その下までは行くことができない。おそらく西塔寺は外国人の観光客が訪れるような観光物ではないのだと思う。再び東寺街へと戻って、人々の賑わいの中をバス停まで漂っていった。

北京路からバスに乗って、昆明の北端にある円通寺へ。数日前歩いた円通寺前の大通りを歩いた。

円通寺はその由来は分らないけれども、とても立派な寺院で中国人の観光客に混じって外国人の観光客の姿も見られた。写真を撮りあう団体や家族連れの観光客特有の少し浮かれたような気分が境内には漂い、つかの間の観光客気分を味わいながら境内を往復した。

円通寺を出て、その北側一帯に広がる昆明動物園に入場した。あいにくまた雨がぱらつき始めたけれども、子供連れやアベックに混じって、動物たちの姿をたどっていった。あいにくの天候のために動物たちは檻の片隅に身を寄せあっているような印象だった。ひっそりとした動物園で、人間たちは建物の軒端や傘の下で身を寄せあうようにして動物たちを見ていた。もしかしたら見られるかもしれないと期待していたパンダの姿は、残念ながら見ることはできなかった。

動物園を通り抜けて、表門から外へ。ひっそりとした北門街という通りを歩いて、翠湖公園脇にある翠湖賓館という立派なホテルで二万円をFECに両替。ホテルを出ようとすると、突然雨が激しく降り始めた。しばらくホテルの軒先で雨宿りをして、小降りになったのを見はからって歩き始めた。

ホテル近辺のひっそりとした路地をたどり、武成路へ。そこは数日前歩いた庶民的な繁華街だ。いつも賑やかに人や自転車であふれている。ここここに店を出す露店や屋台。一見するととても大型バスなど通れそうにもないのだけれども、それでも二両連結のバスは通るのだ。駐車した車や露店、行き交う自転車や横断する人々をかきわけるようにして。

武成路から二路の路線バスは終点が火車站。昆湖飯店までは乗り換えなしで帰ることができる。

昆湖飯店の部屋でしばらく休憩したあと、ドミトリーの部屋を覗いて

みた。宮本君は同室の香港人とともに部屋にいた。ドミトリーがいつばいでツインの部屋にまわされたことを告げると、彼は首をひねりながら、こころ、二日は彼の部屋（四人部屋）は彼と香港人だけでベッドは空いていると言う。ガイドブックにも書いてあるけれども、中国人の服務員の「没落」は要するに気分次第なのだということを思い知らされたのだった。

数日前、僕が宿泊したドミトリーの部屋を覗いてみた。そこには例の水煙草の香港人がいて、僕の顔を見るなり旧友に再会したように顔を輝かせた。そして部屋のどこからポリ製の水筒を出してきて、大事なもののように僕に手渡すのだった。それは僕が日本から持ってきたおもちゃのような水筒で、あまり旅の役には立たないので、大理に発つ日に捨てるつもりで物置の引き出しに置いていったものだった。なんと彼は忘れ物として大事に保管していてくれたのだった。水筒を手渡したあと、彼は僕たちを窓辺へと招いた。彼の招きに従って、洗濯物の干してある小さなベランダに出てみると、ベランダの片隅に鳥かごと小鳥。いとしいもののように、彼は小鳥を僕たちに紹介した。

水煙草の香港人の部屋をあとにして、僕たち（僕と宮本君、それに宮本君と同室の香港人）は夕食に外へ出た。香港人の若者と宮本君はともに一過間近く、あるいはそれ以上も昆湖飯店に滞在していて、気心も通じているようだった。香港人の若者は英語も北京語も話すことができて、僕たちは彼の北京語にもたれていればいいというわけだ。会話は英語と、ごくわずかの北京語と日本語。

リキシヤに乗って北京路を工人文化宮のある広場まで北上し、そこから西へ。実験飯店という名前の、外国人観光客には有名な食堂へと向かった。

リキシヤに乗ってしばらくすると雨が降り始めた。最初はたいしたことではなかったけれども、広場のあたりに近づく頃にはどしや降りになった。手にしていた地図などで雨を防いでいたけれども、どうにも防ぎきれなくなつてリキシヤを止めて建物の陰で雨宿り。

香港人の若者と少し話をした。それによると香港人は六ヶ月以内ならばノービザで中国に滞在できると言うことだった。たとえそれを過ぎてしまつても、ノープロブレムと言う。すでに暮れ落ちた大通りを、ときおり車が水しぶきを上げながら通り過ぎた。雨ガッパを頭から被つた人たちが自転車を通り過ぎていく。

しばらく雨宿りをして、雨足が弱まったのを見はからつて再びリキシヤに乗って、実験飯店へ。それは別に何ということもない少し広い食堂だつたけれども、料理四皿と焼き飯、ビールでひとり八元くらい。中国の食堂は複数に限ると知つたのだった。つまりひとりで一皿の料理を食べる

よりも、複数で複数の料理をつつきあう方が同じ値段でいろんな料理を  
楽しめて満足感も大きいのだ。

実験飯店で夕食をすませて、さて帰ろうとするとまた雨足が強くなっ  
ていた。しばらく軒先で雨宿りをしていたのだけれども、一向に弱くなる  
気配がない。軒先でなすすべもなく、肩をすぼめて雨宿りをしているとき  
に、誰かがホリデーインへ行こうと提案した。もちろん中国にあつては  
我々貧乏人の旅行者には手の届かない外資系最高級ホテル。しかし三人  
で気持ち盛り上がっていたこともあつて、またたく間に「賛成！」とい  
うことになって、三人は降りしきる雨の中を駆けっこをするようにホリ  
デーインに向かって飛び出した。

見るからに高そうな高級ホテルに足を踏み入れて、レストランへ。うや  
うやくメニューを差し出すウェイターにコーヒーとケーキを注文する。  
ウェイターもウェイトレスもそれらしい制服に身を包んでいる。別世界  
のように静かに落ち着いたレストラン。不似合いな場所で、心のどこかで  
は緊張しながら、そしてむしろその緊張を楽しみながら久しぶりのおい  
しいコーヒーを味わった。子供のよう三人でふざけあいながら。ちなみ  
にコーヒーとケーキでひとり三〇元弱、三食分の値段だった。

ホリデーインを出ると、すでに雨はほとんど上がっていた。久しぶりの  
楽しい気分の余韻を味わいながら、再びリキシャに乗って昆湖飯店へと  
戻った。

※

五月三十一日(月)朝八時前に荷物をフロントに預けて、昆湖飯店をチェ  
ックアウト。宮本君とともに汽车站の方へと歩いていった。石林(シーリ  
ン)行きの観光バスを飛び込みでつかまえるつもりだった。が、実はつか  
まったのは僕たちの方だったのかもしれない。

汽车站付近の歩道には何人かの客引きが『石林』と記されたボードを掲  
げながら、運行く人たちに声をかけていた。その内のひとりには僕たちはつ  
かまった。ボードには『石林、一日四遊 三〇元』と書いてあったが、客  
引きの女がまくし立てる言葉を聞いていると、どうやら二人で四〇元だ  
ということだった。条件は大差ないようだったので、彼女の導きに従って  
付近に停車していたミニバスに乗り込んだ。先客は数人。

八時に出発だと言っていたミニバスは、それを過ぎても出発する様子  
はない。おそらく個人営業のミニバスで、できるだけ稼ごうと満員になる  
までねばるつもりだったのだろう。露店の小包子やもち米のおにぎりな  
どを朝食に買い込んで、気長に出発を待っていた。

やがて乗客は一〇人くらいになって、ようやく出発、と思ったら動きだしたミニバスは他の場所に移って、呼び込みを続けるのだった。そのようにしてうろろするミニバスは数台。

やがて九時を過ぎた頃に、ミニバスの運転手が交渉を始めた。ガラガラのバスでそれぞれ乗客を運ぶよりも、一台にまとめて満員にしようということだったのだろう。客の少ないミニバスから僕たちのミニバスに乗客が乗り込んできて、めでたく満員となったバスはようやく出発した。

石林は昆明の南東一二六キロ。サニ族の自治区にある有名な観光地だ。およそ二億八千年前海底であった一帯が地殻の変動による隆起作用で現在のような地形になった。海拔一七五〇メートルのあたり一帯には高さ五メートルほどの灰色の石柱がそれこそ無数に石林のように林立している。典型的なカルスト地形で、付近にはいくつかの鍾乳洞も口を開けている。

石林への観光客を運ぶために特別に整備されたのだろう。昆明から石林までは立派な道路が続いていて、ミニバスは猛スピードで飛ばしている。一時間半ほどで石林付近に到着した。

午前中は石林付近の鍾乳洞、地下石林など二カ所を見学。様々にライトアップされて美しい鍾乳洞をぞろぞろと歩いた。ひんやりとした鍾乳洞を抜けると、お土産物屋。サニ族の民族衣裳を着た女たちが声をかけてくる。フリーの売り子たちは自分で作った刺繍品(大きな壁掛けのようなものから座布団の被い、財布や頭の飾り、腰紐まで)を手にして声をかけてくる。これだと思った客(日本人などは絶好の客なのだ)にはどこまでもしつこく付きまといつてくる。女たちの攻勢にたじたとになって、お土産に財布大二つと小一つを買った。

食堂で昼食をすませたあとは、いよいよ石林の見学。入場一〇元のチケットを購入して、石林公園へ入っていく。

同乗の中国人たちとすぐさまはぐれて、宮木君とふたり、あーだこーだと言いながら、道に迷う。たまたま通りかかったサニ族の女性が道を教えてくれた。親切に教えてくれたあと、赤ん坊を背負った女性は、

「私の店は八〇番だから、あとで寄ってください」

と片言の日本語で言う。石林公園を入ったところに石林湖があって、そのほとりには常設のお土産物の露店が並んでいる。その八〇番が彼女の店なのだ。あとで寄ることを約束して歩き始めた。

しばらく歩いて、または僕たちは迷ってしまった。石林への入口を通り過ぎて、田舎道に迷い込んでしまったのだ。緑の木立の向こうは茶色い土を剥き出しにした丘と所々に飛び出した灰色の岩。誰もいない。首を傾

げながら後戻りをしようとする、またサニ族の女性と出くわした。僕たちのかたわらを歩きながら、しきりに片言の日本語を投げかけてくる。途中小さな集落を通り抜けるときに

「サニ族の家、サニ族の家」

と繰り返す。どうやら案内しているつもりらしい。ようやく見つけた石林への入口で別れるとき、

「オミヤゲ、オミヤゲ。あなたオミヤゲ買うね」

と繰り返す言葉を適当にあしらいながら小道の石段を登っていった。

しばらく石段を登っていくと、獅子亭と名付けられた高台に出た。そのあたりには多くの観光客が集まって、記念写真を撮ったりしている。獅子亭から眺めた石林は緑の木立の間に様々な陰影を見せる無数の灰色の岩が林立していて、奇景というには違いなかったけれども、そんなに迫力のあるものではなかった。少々拍子抜けという感じで、さらに石林の内部へと小道をたどっていった。

ところが外からの眺望と、内側から体験するのとは大違い。石林の内部はまるで石の森のようで、すぐに僕たちは自分の位置というものを見失う。かたわらにそびえる無数の岩は、あるものは天に突き刺さった矢のようであり、あるものはやわらかい曲線を描き、またあるものは視界をさえぎるように立ちふさがる。洞窟のようにおおいかぶさった岩の間を通り抜けるときには、ひんやりとした冷気が頬をかすめた。様々な表情で追ってくる無数の岩、また岩。方向がまるで分からないまま、僕たちは前を行く中国人たちのあとをついていく。まるで巨大な岩の迷路。

一時間ほど歩いて、望峰亭に着いた。そこは石林のまっ只中にある高台で、頂上からの見晴らしは思わず息をのむほどだ。望峰亭で気持ちの良い風に吹かれながら、眼前に広がる石の森を眺望して、ふと僕は五百羅漢を思い出していた。木立の間に突き出したそれぞれの岩はその形も、その陰影も異なつて、まるで様々な表情をした五百羅漢なのだった。それぞれの僧として具体化される以前の混沌。あるいは具体的な僧形を通り抜けた抽象。

望峰亭を降りたあとは、再び石の密林。あるいは迷路。一時間ほど歩いていると、次第に人影も少なくなり、心細くなってくる。帰りの集合時間が四時だったので、それまでにこの迷路を抜け出さなければ、と思うと焦ってくるのだった。しかし焦っても焦っても、ただ石の森だ。

心のどこかにパニックが兆し始めた頃に、ようやく広い道に出た。おそらく石林を外周する環林公路だろう。冷や汗をかきながら歩いていくと、若いサニ族の女性に引率された観光団体の姿も見えて、ようやくひと安心。売店でよく冷えたジュースを飲んで、休憩した。



帰りの時間が追っていたけれども、約束だったので石林湖の湖畔に並んでいたお土産物屋を覗いた。八〇番の露店を覗いて安い座布団カバーのようなものを買った。あちこちの露店から「私も、私も」と声がかかる。そのうちにどこから来たのか、さつきサニ族の村を通り抜けたときに勝手に案内していた女性が僕たちを見つけた。

「約束、約束。私の、買うね。私、案内した。私のも、買うよ」

もうこれ以上は必要がなかったし、ミニバスの時間が迫っていたので無視して歩き始めた。

「日本人、ウソツキ。私の、買うの、約束ね。日本人、ウソツキ」  
背後から連発される捨て台詞がちよつとこたえたのだった。

帰りも猛スピードで飛ばしたバスは六時前に昆明に到着した。

すでに部屋をチェックアウトしたあとだったので、宮本君の部屋で休憩した。四人部屋には宮本君と香港人だけだったので、ゆっくりすることができた。中国で流行の兆しを見せているポケットタイプのテレビゲームをした。駅の売店などで六、七〇円で売られているものだ。決して安いものではないが、列車の中などで若者が夢中になっている姿を見かけることもある。

七時半過ぎに、三人連れ立って食事に出た。昆湖飯店から少し北に歩いたところ。和平路はまるでお祭りのような雑路だった。路上には無数の露店や屋台が並び、人々は熱帯魚のように和平路を行き来していた。路上のあらゆる場所から発せられる無数の声は反響しあい、熱のように路上に立ちこめる。滞在の長い香港人は馴染の街をいくように僕たちを一軒の食堂へと案内した。たつぷりと食べて、ひとり八元強。ひとり一〇元ずつ出して勘定をすませて、おつりは成都への餞別として香港人は僕に手渡した。

雑踏を泳ぐようにして、和平路を歩いた。昨夜の実験飯店やホリデーインのこと、今日の石林観光の余韻がさめず、お祭りのような和平路の雑踏を抜け出るとき、まるでひとり暖かいところから、親密な人たちから去っていくような、後ろ髪を引かれるような気がした。

食後にアイスクリームを食べていくという二人と別れて、良湖飯店に預けてあった荷物を受け出して、ひとり昆明站へと向かった。